

Ⅱ 退官にあたって

美しかりき犬山のサンライズ

大島 清

十九年弱、となると二昔になってしまう。こんな筈ではなかった。長くて十年以内、それが私の一職場での持ち年数だ。そんなことをかつてこの年報に書いたことがある。居心地のよいことに、教授が二十年も三十年も務めるのは、どだい間違っている。さっさと後進に席をゆずって、己れは再び新しい職場に転進するべきだ、とも。それが十九年になる。もっとも教授になってからはちょうど十年足らずだから、本当は丁度変わりどきだったのかも知れぬ。

もうそろそろ辞めようと思っていたら外から仕事が入った。続いて三つもである。委託研究の仕事だ。九部門が出来上がってしまうと、途端に文部省はケチになるから、みみっちい科学研究費など当てにはできまい。

研究所に来た当時は、産学共同の研究に白眼を向ける輩もいるにはいたが、今では誰でも歓迎するだろう。当時は、むしろ私の研究室には科学研究費がふんだんにあったので、その頃まだピーピー言っていた小野薬品工業株式会社からは一銭も貰わず、プロスタグランディンの研究に没頭したものだ。

プロスタグランディンが海のものと、山のものと不明のあの頃、現在のように、生殖面のみならず、情報伝達物質としても、血液脈管系の調節物質としても、ほとんどあらゆる生体機能のホメオスタシスに関与しているなど想像だにできなかった。分娩発来の際にも、プロスタグランディンが主役を演じているらしいことも分かっている。

今回企業から申し出のあった委託研究もすべてプロスタグランディンの誘導体に関するものだ。一つはE₂のゼリー体、これを子宮頸管内に投与することによって、いかに頸管が熟化するか、他の二つは、消化を抑える誘導体で、これを妊娠ザルに投与した時の子宮収縮の動態を研究するものである。

実は後者に関しては、昔、小野薬品工業との共同実験をやっている厚生省の認可がおりている。学会雑誌にも発表してある。これが厚生省が新薬を検討するときのバイブルになった。企業が私のところへ依頼に来るのもむべなるかなである。

研究費の多額性に驚いてはいけな。文部省とは違うのである。文部省の科研費(A)に相当する研究費が次から次へと来る。生理部門のためにはもちろんいいことだが、研究所にとっても、まんざら悪いことではあるまい。

零細な研究費に慣れきっている研究所の人たちは、五百万、一千万円といったゼニの動きに、驚嘆の眼差しを向ける。しかし、十年前の機器はもはや反古同然である。買替えなければならない機器が何台もある。何千万研究費が入っても追いつかないほどであることは誰でも知っている。そういった意味で、委任経理金の多量の導入は、研究所全体で喜ぶべきことなのである。

話題を変えよう。

最終講義の直前、朝日新聞の記者が私の研究室を訪れた。何か心のこりは無いか、と言う。淋しくないか、と尋ねているのである。教授として十年、それに、みんなにほどほどの迷惑をかけながら、好きなことを存分にやらせてもらった。そういう意味で未練はない。

研究所の連中と別れる、といっても、何処でも会えるから永遠の別れとも思わない。心のこりと言えば、あの五階の研究室からの眺望か、はたまた、朝ジョギングする路傍に咲いていた草花か、青空にひびいた鳥のさえずりか。そう答えたら翌日の新聞に「しみじみ」と表現してあった。

それにしても自然への愛惜の情はほんものである。思い立てば、いつでも研究所の住人に会えるかも知れないが、高台からの日の出、西空を真っ赤に染める日没の風景、時折聞こえるサルどもの喚声は独特のものだった。

私は夜に弱い。早朝起床なので自然とそうなのだろう。時にはくたびれて午後十時頃就寝することもある。もちろん研究室のカウチを伸ばして、ロッカーに納めてある羽毛ボタンを取り出して巣づくりをしてからである。夜の静寂は、東京

にも名古屋にも大阪にも無い犬山独特のものだ。

すると起床は決って午前三時すぎ、コーヒーをすすりながら、その日のスケジュール調整をやったり、本を読んだり、原稿も書く。一日でいちばん能率の上がる三時間だ。六時半頃から一時間のゆっくりジョギングに出かける。コースは四方八方にひろがっている。

今井部落への峠に雪の積もっていたときもあった。初冬に、自然でしか出さぬ色でカラスウリがぶら下がっていることもあった。その場所も、今は刈り取られてしまって跡かたもない。尾張自動車道沿いに木曽川に近づいたあたりは野生の藤の花が、紫のかすみ網をかけたように広がっている。穂を刈り取った田んぼの上を、つがいの田ちどりが、チーチーと私を迎えてくれるように感じることもあった。寂光院あたりの紅葉のみごとは筆舌につくし難い。坂を上り、坂を下る。呼吸を荒ませながら、しばし、ジョギングの足を止めて見とれることも多かった。ジョギングのあとは、本棟地下のシャワーを浴び、汗で濡れた衣類の手洗いをしてほっとすると九時が近い。そんな毎日が続いたように思う。

人には何時でも会えるが、研究所に寝泊まりしてジョギングを繰り返すことはもうあるまい。十年以上にわたるそんな生活をしみじみと思い出してみるのである。

肝心の研究生活だが、生殖生理の幟を打ち立てた私は、最初は孤軍奮闘の毎日だった。そのうち林基治さんが参加し、共同利用の若者たちと、性

のリズムとホルモン、そしてプロスタグランディンに対決する。あとから入った野崎眞澄さんが、中枢ホルモンとリズムに取り組んでくれた。

林基治さんはその後、初期発生における脳内の神経ペプチドホルモンの動態に取り組んだ。

三十年前の己の姿を、わが教室の若き研究者たちの姿に重ね合わせてみる。機器も発達し、方法も高度になったが、好奇心をもって模索し、発見して感動する一途な態度には共通したものがある。私自信は怠惰になった代わりに、その分、視野をひろげたのだと思う。アカデミズムの中にどっぷりとつかって、井戸の中の蛙然としている輩の中には、セクソロジーにまで探究の巾をひろげた私に対し、時に侮蔑めいた助言をする者もいるが、私は意に介さない。

人間の複雑な「生と性」の行動基質に、ことごとく生物学を着地させ得ない以上、私にはどうしても学際的なセクソロジーを援用しないではられない。

セクソロジーを、草紙な下半身性交学と解釈する奴は、サル知能にも劣ると知るべし。そういった多彩多忙な私の毎日を、蔭ながら援護射撃をしてくれた清水慶子さんに心から感謝の意を捧げたい。とりわけ、子育ての初期には人には言えぬ辛さがあっただろう。また生理部門に出入りしてくれ、私のはげましとなった大学院生の諸君そして所員のみなさんにもお礼を言いたい。何度でも言うが君たちとの付き合いは永遠だ。